

# 「私」における世界の破れ

鈴木正也

## 0. はじめに

当論文で、世界が「私」において外部へ開いており、世界は閉領域ではないことを論証する。その結果、世界は物理的に閉じてもないし、自己意識は脳過程に還元できないことを示す。

## 1. 前提

論証に先立って、以下の前提を置く

- ① 二者関係と三者関係を考え、前者を内在関係、後者を外在関係と名づける。
- ② 「私」は発話者のことである。あるいは、「私」は発話者を指示する。
- ③ 世界とは記述世界（認知された世界）のことであり、記述され得ない世界は言及しようがないので考慮しない。

### (1) 内在関係と外在関係

二者関係と三者関係を区別する。二者関係とは、例えば、Aから見た（によって考えられた、記述された）AとBの関係である。これは主として、「私」から見た「私」と世界の関係として定式化される。三者関係とは、Cから見たAとBの関係である。これは主として、「われわれ」から見たAとBの関係として定式化される。例えば、「私が木の葉を見る」という記述は「私(A)と木の葉(B)」の関係を「私(A)」が記述しているので二者関係の記述である。これに対して「彼は木の葉を見ている」という記述は「彼(A)と木の葉(B)」との関係を「われわれあるいは誰か(C)」が記述しているので三者関係の記述である。あるいは「空は青い」という記述は「私(A)と空の色(B)」との関係を「私(C)」が記述しているので二者関係である。これに対して「空の色は光波××である」という記述は、「空(A)と光波測定機(B)」との関係を「われわれ(C)」が記述

しているので三者関係である。「彼は彼自身が薄暗い道に迷ったのに気づいた」という記述は、「迷った」を関係項とすれば、彼(A)と道(B)の彼(A)から見た関係と見なされるので、二者関係になる。ところが、関係項を「気づいた」と考えるならば、「彼(A)」と「気づいたこと(B)」の関係を誰か（もちろん、誰かが彼自身であることはあり得るが）が記述したことになり、三者関係になる。このように、関係項のとり方によって、二者関係にも三者関係にもなることに注意しよう。

ところで、「私は自分が道に迷ったのに気づいた」と言う記述では、記述者は必然的に「私」であるので、「私(A)」が「道に迷ったということ(B)」に「気づいた」と言う関係を「私(A)」が記述していることになり、二者関係となる。

われわれは、二者関係を内在関係、二者関係で記述された世界を内在世界、三者関係を外在関係、三者関係で記述された世界を外在世界と名づける。内在世界はほぼ主観的世界に、外在世界は客観世界と対応していると考えられるが、主観・客観は定義が困難であるので、上のように定義された内在・外在なる用語を用いる。内在世界、外在世界およびそれらの関係を図1のように図示する。

図1において、「楕円形」は実体を示し、「矢印」は実体の性質ないしは状態を示す。長方形は内在世界あるいは外在世界を示す。

図1において、ライオンの内在世界は「ウサギが走っている」である。なぜなら「ライオン(A)」と「ウサギ(B)」のライオン(A)から見た関係であるからである。それに対応するわれわれの外在世界は「ライオンはウサギが走っているのを見ている」である。この場合は、「ライオン(A)」と「ウサギ(B)」の関係「見ている」を「われわれ(C)」が記述しているから

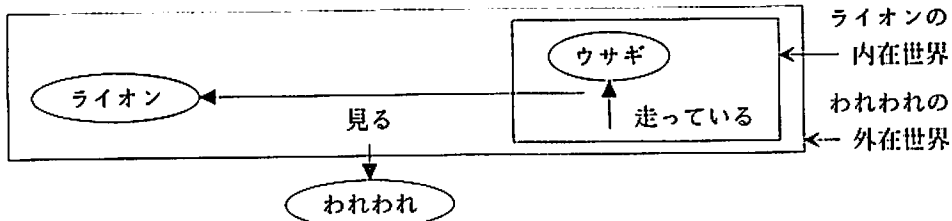


図1 内在世界と外在世界

である。この図は、内在世界においても外在世界においても、ライオンが意識しているのは「ウサギが走っている」ということであり、「自分がそれを見ている」ことを意識していないことを示している。

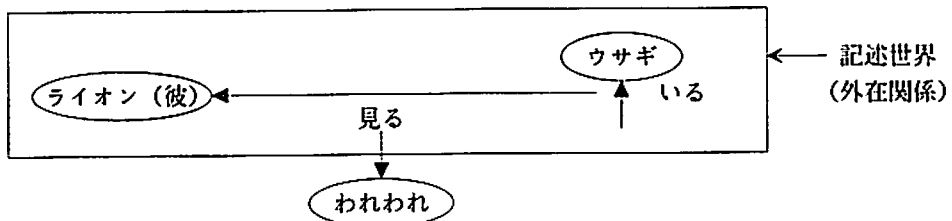
## (2) 「私」とは発話者である

「私」が発話（記述）者であるという意味は、「私」という言葉が記述内に現れた場合には、常に記述（世界）の外の「私」を指示しており、記述世界の外部の「私」が記述世界を定立しているということである。例えば「ライオンがウサギを見ている」という場合の「ライオン」は「見ている主体」を指示しているのであって、記述の外部の何かを指示している訳ではない。同様に「彼はウサギを見ている」という場合の「彼」も同様に、「彼」は「見ている主体」を指示しているが

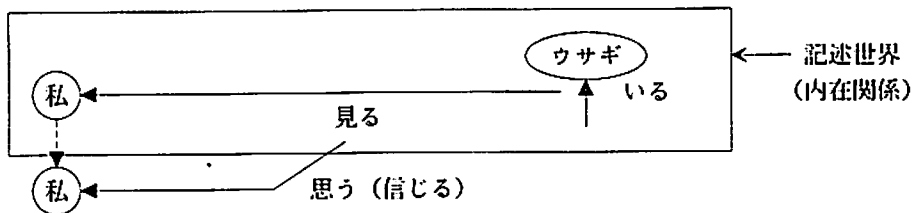
記述の外部の何かを指示している訳ではない。しかし、「私はウサギを見ている」という場合の「私」は「見ている主体」を指示するだけではなく、記述の外部の記述者（発話者）をも指示しており、その記述世界を定立（記述）しているのである。

そして、もう一つ重要な相違がある。「私がウサギを見ている」という場合は「私」と「ウサギ」の二者関係であるので、内在関係（内在世界）の記述であるのに対して、「ライオンがウサギを見ている」あるいは「彼がウサギを見ている」という場合には、「ライオン（あるいは彼）」と「ウサギ」と「われわれ」の三者関係であるので外在関係（外在世界）の記述であるということである。

したがって、この2つの相違を図示すれば、次のようになる。



(1) 「私」の存在しない場合



(2) 私の存在する場合

図2 外在関係と内在関係

図2において、「私」が記述世界の内部と外部に記され、点線の矢印で結ばれているのは、記述内部の「私」が外部の私を明示的ではなく暗黙的に指示しているという意味を表現したものである。

図2(1)の外在世界は、「ライオンはウサギが走っているのを見ている」であり、図2(2)の内在世界は、「私はウサギが走っているのを見ている」である。

### (3) 世界とは記述世界のことである。

私たちが考察の対象とするのは記述世界であって、記述を離れた世界ではない。ただ、「私」という概念のみが、常に記述世界の外部を指示している。しかし、ここで注意が必要である。私たちは、現実を考察した結果、記述世界が生じるのであって、考察の対象が記述世界であるわけではない。それはちょうど、私たちが知覚するのは知覚対象であって知覚内容ではないのと同様である。しかし、知覚しているものは知覚内容に尽きるのであって、知覚内容に存在しないものは知覚してはいないのである。同様に、われわれは確かに、現実を考察した結果、記述内容を得るのであるが、記述内容以外のものは考察しようがないのである。もし考察しようがあるのであれば、それは記述内容となっているはずだからである。

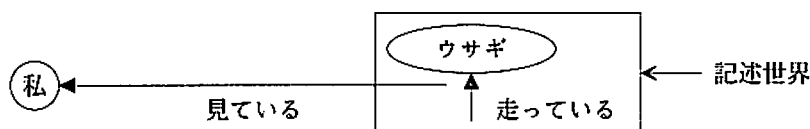


図3 閉領域の内在世界

これに対して、記述世界に「私」が存在する場合には「私」において記述世界は常に外部に開かれている。そのことは、図2の(2)によって示される。この図において、記述世界の内部の「私」から外部の「私」へと矢印が記述されているが、これが記述世界が「私」において外部に開かれていることを示しているのである。

## 2. 論証

論証は次のステップを踏んで行う。

- ① 内在世界は、「私」において常に世界の外へと開かれている。
- ② 外在世界は閉じている（閉領域である）。
- ③ 内在世界を外在世界の中で記述することによって、内在世界を閉領域とすることができる。
- ④ しかし、自己（意識）を含む内在世界を外在世界は記述する（認知する）ことが出来ない。
- ⑤ 故に、自己意識を含む内在世界は「私」において、外部に開かれており、自己意識の内在世界を含む外在世界も「私」において、外部に開かれることになる。すなわち、外在世界の記述世界は閉領域を形成し得ない。

### (1) 「私」が記述世界内部に存在する内在世界は常に世界の外部へと開かれている。

すべての内在世界が外部に開かれている訳ではない。今、私の記述世界（内部世界）が「ウサギが走っている」である場合、記述世界の中に「私」が存在しないので、「ウサギは走っている」という内在世界（の記述）は閉領域を形成している。そのことは、図3において、記述世界の内部から外部へ向かう矢印が存在しないことから明らかになる。

### (2) 外在世界は閉領域である。

図1と図2の外在世界を見れば分かるように、「われわれ」は記述世界内に存在しない。したがって、記述世界は常に閉領域である。すなわち、記述世界内の情報は決して記述世界の外の情報を指示することはない。

三者関係における「われわれ」は世界の記述者であるが、記述対象ではない。したがって、記述世界は閉じている。しかし、二者関

係における「私」は世界の記述者である共に記述対象であるために、「私」において世界は開かれることになるのである。

(3) 内在世界は外在世界の中に記述することによって閉領域にすることができる。

内在世界を外在世界の中に記述することによって閉領域にすることができることを図4

を用いて説明する。

図4において、「私」の記述世界は、「私」を媒介にして記述世界の外部へ開かれている。すなわち閉領域でなくて、開領域である。しかし、「われわれ」の立場から観察すれば、「われわれ」の記述世界である外在世界は閉領域を形成しており、その中で、「私」の内在世界は十分に記述されている。すると、

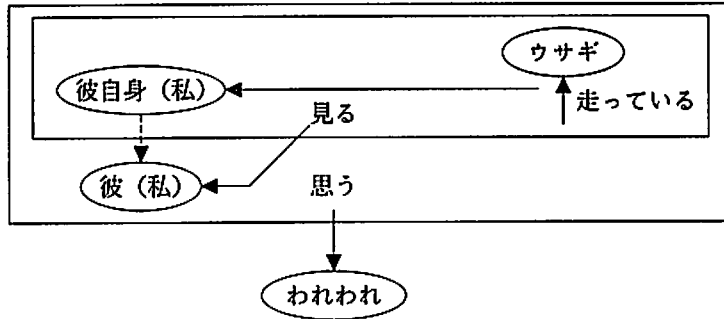


図4

「私」は外在世界の外の何かを指示することはない。したがって、私の記述世界(内在世界)を閉領域にすることができる。

すなわち、「私」の「私はウサギが走っているのを見ている」という内在世界は「私」を媒介として外部に開かれているが、「われわれ」の観点から「彼は彼自身がウサギが走っているのを見ていると思っている(信じている)」と記述することによって、「私」の内在世界を閉領域にすることができるのである。

このことは、何を意味しているか。第1には、内在世界は外在世界に情報を失うことなく、還元可能であることを示している。第2に、内在世界が現象世界、心的世界であり、

外在世界が自然科学的世界であるとするならば、心的世界は物理的世界に還元可能であることを示している。第3に、「私」の内在世界には「自己」が現れていないが、それに等価な「われわれ」の外在世界には「彼(私)」の自己が現れていることに注目しなければならない。

(4) 自己(意識)を含む内在世界を外在世界は記述する(認知する)ことが出来ない。

次に、自己(意識)を含む内在世界と外在世界について検討する。これは、図5のようになる。

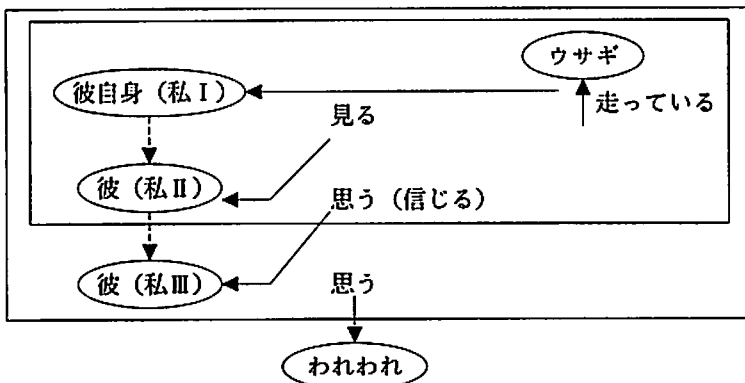


図5

図5の内在世界は、「私（私Ⅱ）」は自分（自己＝私Ⅰ）がウサギが走っているのを見ていると思っている」となって、内在世界の中に「私（私Ⅱ）」と「自己（私Ⅰ）」が存在し、自己意識の記述になっている。さらに、図5の外在世界は内在世界を十全に記述しているので、閉領域を形成しているように見える。

図5が、自己意識の内在世界を含む閉領域になっていないことを示すためには、次の2条件を論証すればよい。

- ・条件(1) 図5と図4の内在世界は異なっている。すなわち、図5の「私Ⅲ」の内在世界は有意味である。
- ・条件(2) 図5と図4の外在世界は同一である。すなわち、図5の外在世界は図4の外在世界に還元可能である。

条件2が成立すると、「私Ⅲ」は外在世界の外に出ることになり、外在世界は「私」において開領域となる。

#### （4-1）図5と図4の外在世界が同一であることの論証

まず、図5の外在世界と図4の外在世界は実質的には同じであり（情報的には等価であり）、区別がつかないことを示そう。そのことを示すためには、次の2条件が成り立つことを示せばよい。

- ・条件(3) 「彼は自分がウサギを見ていると思っている」ならば「彼は自分がウサギを見ていると思っていると思っている」である。
- ・条件(4) 「彼は自分がウサギを見ていると思っていると思っている」ならば「彼は自分がウサギを見ていると思っている」である。

まず、条件(3)が成立することを示そう。条件(3)の前半部分の外在世界を彼の内在世界を記述する仕方を書き直すと次のようになる。

- ・命題1 「彼は「私はウサギを見ている」と思っている」

ここで、命題1の内側のカッコで囲まれた記述が、彼の内在世界である。この内在世界に注目すると、内在世界の「私」は外部の「私」（この場合は「彼」）を指示するので、それを内在世界に取り込むことができる。すると、命題1は、次の命題2になる。

- ・命題2 「彼は「私は自分がウサギを見ていると思っている」と思っている」

すなわち、内在世界「私はウサギを見ている」ことからいつでも「私は自分がウサギを見ていると思っている」を導出できるのである。命題2の内在世界を示すカッコをとり払うと、「彼は自分がウサギを見ていると思っていると思っている」となり、これは条件(3)の後半部分に他ならぬ。よって、条件(3)が成立することは論証された。

次に、条件(4)が成立することを示そう。条件(3)が成立するので、同様に、次の条件(5)が成立する。

- ・条件(5) 「彼は自分がウサギを見ていると思っていない」ならば「彼は自分がウサギを見ていると思っていないと思っている」

ところで、意味を考えると「見ていると思っていないと思っている」ということは少なくとも「見ていると思っていると思っていない」ことなので、条件(5)を条件(6)に書き換えることができる。

- ・条件(6) 「彼は自分がウサギを見ていると思っていない」ならば「彼は自分がウサギを見ていると思っていると思っていない」

条件(6)の対偶をとると条件(4)になる。よって、条件(6)は成立するので条件(4)は成立する。QED

以上によって、図5と図4の外在世界は同一であると、論証された。

次になすべきことは、図5と図4の内在世界が異なることを論証することである。ところで、上の外部世界と同じ論証を使用すれば、図5の「私Ⅲ」の内在世界と「私Ⅱ」の内在世界が同一となり、図5の内在世界は図4の内在世界に還元されるように思われる。しかし、内在世界と外在世界の異なるところは、内在世界においては「私」が世界の内部と外部の両方に存在するが、外在世界では「われわれ」は世界の内部には存在しないという点である。したがって、「私Ⅲ」の内在世界と「私Ⅱ」の内在世界は同一であるが、「私」が記述世界の内部と外部に存在するという点を記述するためには、「私Ⅰ」と「私Ⅱ」の存在を記述できなければならない。すなわち、「私Ⅲ」の内在世界を必要とするのである。

「私Ⅱ」の内在世界では「私Ⅱ」の存在は記述できないからである。したがって、図5の「私Ⅲ」の内部世界を図4の内部世界に還元できない。QED

(5) 自己意識を含む外在世界は「私」において開領域になっている。

以上から、外在世界は図5から図4に還元され、内在世界は図5のままなので、図6に示されているように、外在世界と内在世界は一致することになり、「私Ⅲ」は外在世界の外部に存在することになり、外在世界では自己意識の「私」を記述できない。したがって、自己意識を有する「私」において、外在世界も内在世界も、開領域となっている。

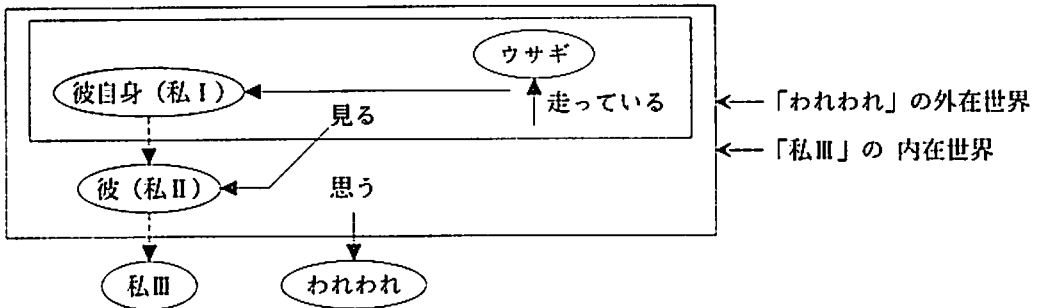


図6 自己意識における内在世界と外在世界

この結論は、意外な結果なので、ここまでの議論の道筋を箇条書きに整理しよう。

- ① 私が含まれる記述（正確には地の文に私が含まれる記述）においては、「私」は記述世界内に存在するとともに、記述者として記述世界の外に存在するので、私は記述世界において自由な存在である。すなわち、私は記述世界内の因果関係に支配されない。このことが、主観的世界において、私は自分が自由であると意識する最大の理由である。
- ② ところで、第三者からの記述、私を彼と見なした記述においては、彼は記述世界の内部にのみ存在し、決して記述世界の外部のだれかを指示することはあり得ないので、彼は記述世界の因果

関係に支配されることになる。これが、人は客観的には因果関係に支配されるように見える最大の理由である。また記述者の第三者は記述外にのみ存在し、記述世界の内部に存在することはないので、記述世界に影響を与えることはあり得ない。すなわち、単なる外部観察者である。したがって、第三者による記述世界（外在世界）は因果法則に支配されると考えることができる。

- ③ 以上から、主観的世界においては「私」は自由であるが、「私」を「彼」と見なした客観的世界においては私は因果関係に支配されていることになる。したがって、私が含まれる記述文を意味を変えないで（あるいは真理値を変えないで）、「私」を「彼」に変えた第三

者からの記述文に変えることができたならば、第三者から見れば（客観的には）、「私」は因果関係に支配されることになる。

- ④ その書き換えを行ったところ、自己意識の存在する私の記述文を第三者から見た記述文に書き換えることは不可能であることが論証された。
- ⑤ したがって、私の主観的世界における自己意識は客観的記述世界においては記述できないので、主観的世界における自己意識が存在する世界についての客観的記述世界は情報的に不完全なので因果関係が成立し得ない。このことは、客観的世界において、自己意識が記述できないということではない。客観的世界において自己意識を記述できるが、その自己意識は主観的世界では自己意識になっていないのである。

以上が、この論文における大筋の議論と結論である。問題は記述世界をそのまま実在世界と見なすことができるのか、ということである。これは重要な問題であるけれども、ここでは立ち入らないで、記述世界は実在世界であると仮定する。すると、自己意識の存在する世界は客観的には因果関係が破れており、自己意識を記述できないのであるから、脳に還元できないことになる。

### 3. 付随的な帰結

次のようなことが付随的に帰結する。

- ① 自己意識は無限後退するという主張がある（Thompson 2005）が、「思っている」と思っている」は「思っている」に還元されるので、自己意識は無限後退（無限遡及）しないことが、同時に論証された。

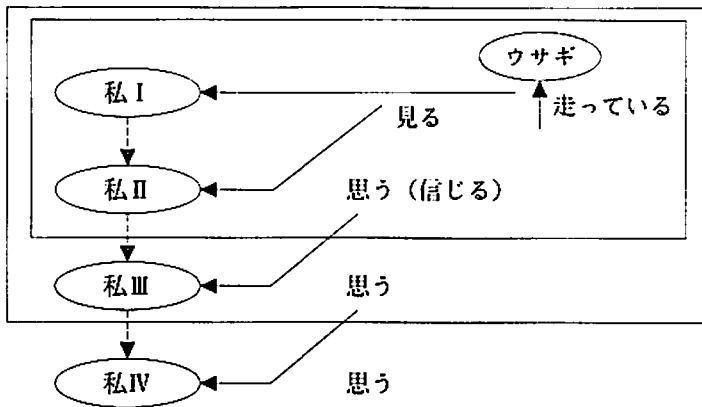


図7

図7において、「私Ⅲ」の内在世界は「私Ⅱ」の内在世界と同じになり、「私Ⅱ」の内在世界に還元されるので、「私」の無限後退は避けられる。

- ② さらに、「われわれ」の外在世界は「私Ⅲ」の内在世界に一致するので、図7のような「私Ⅳ」の内在世界は外在世界を含むことになる。これによって、「私」が「私」を含む外在世界を思い描くことができるのである。

- ③ 自己とは世界内部の「私」のことであり、「私」とは世界外部の世界を定立する「私」であると考えることができる。
- ④ 自由とは、「私」が世界の外部と内部の両方に存在することの意味である。したがって、外在世界の外部に存在する「私」を外在世界を記述することができないので、外在世界は自由が存在しない可能ように記述されることになる。

- ⑤ ジャクソンの思考実験 (Jackson 1986) における、モノクロ部屋での神経科学者は、色についての外在知識を学習したが、色についての内在知識は部屋を出て初めて学習したと考えることができる。色が光波であるというのは、「色」と「計器」と「われわれ」との三者関係であるのに対して、「空の色が青い」というのは「空の色」と「私」の二者関係であるからである。同様に、ネーゲルのコウモリがどのように世界を見ているのかをわれわれには理解できないという主張 (Negel 1974) は、われわれはコウモリの内在知識を知ることにはできないと主張していることになる。コウモリの内在知識が二者関係の知識であるので、定義のよって知ることはできないのである。

#### 引用文献

- Jackson, Frank 1986, "What Mary Didn't Know?", *The Journal of Philosophy*, 83(5): 291-5
- Negel, Thomas 1974, "What is it Like to be a Bat?", *Philosophical Review* 83: 435-450
- 信原幸弘 2004, 心の哲学の基本問題, in 信原幸弘編, 心の哲学Ⅲ 勁草書房, 2004, 1-16
- Thomasson, Amie L. 2005, "First-Person Knowledge in Phenomenology", in Smith, David W. and Thomasson Amie L. (Ed.) *Phenomenology and Philosophy of Mind*, Clarendon Press Oxford 2005, 115-139